序文

1　はじめに

文化は冷戦の武器であった。本書は、脱植民地化や近代国民国家の形成が冷戦構造の中で進んだ東アジアにおいて、文学、映画、大衆音楽、若者文化を含めた広義の「文化」が、政治的・文化的・社会的機能をいかに果たしたのかという点に注目した議論を集めたものである。二〇世紀終盤以降、急速に進んだ冷戦期文化研究において、当初はアメリカ合衆国およびヨーロッパという西の冷戦フロンティアにおける文化冷戦の展開に強い関心が向けられていたために、東の冷戦前線である東アジアにおけるそれについては、相対的に注目度が低い時期が長かったが、ことにこの一〇年で、諸国で充実した研究成果が積み上げられつつある。しかしながら、日本の研究者が、東アジアの他国の冷戦文化について情報を得ることは、必ずしも容易ではない。英語で書かれた研究を通してのみ、東アジア他国の文化冷戦について知る

ことができるというような、冷戦の遺制のなかに私たちはある。したがって、こうした研究動向をふまえながら、特にアメリカ合衆国の影響の色濃い東アジア冷戦文化の系譜学に注目する本書は、最新の研究動向を形作りたいという願いを持ちつつ、翻訳論文七本を含め、日本語論文集として発表することにも意義を見出している。

本書は、各章個別に、あるいは複数章の連鎖・連合・化学反応により、文化冷戦のインターアジアな展開を考察し、グローバル冷戦文化研究に接続することを目指すものである。東アジア冷戦文化外交は、アメリカ合衆国と東アジア各国とのあいだで個別的・局地的に展開された場合もあれば、東アジア全体を冷戦フロンティアを形成するブロック・圏域とする地政学的発想に基づき、各国を横断し、連関させ、交差させる形で実行された場合もある。冷戦期の文化政策上の企画は、ときに東アジア諸国間の協同を、ときに競合敵対を導きだすことにより、アメリカ覇権を維持しようとしたものであるとも言えるだろう。アメリカ覇権に対して批判的検証を行うためには、東アジア冷戦文化や複数の冷戦文化企画の相互関係についての理解を共有し、文化冷戦をインターアジアな視座からも捉える必要がある。

時間軸としては、本書は一九四〇年代後半から一九六〇年代の冷戦前期に軸足を置きつつ、一九三〇年代から冷戦体制崩壊の時期までを扱っている。副題にあるように、本書は一九四五年を跨境した研究であり、一九四五年以前と以降の東アジアにおける文化の、断絶ではなく、反復性・連続性・再活用面に注目する貫戦史的な視点を採用する。文化冷戦に携わったひとびとの多くが、一九四五年以前に生まれ、教育を受け、人格を形成したという事実のレベルにおいても、一九四五年以前の文化政治と冷戦文化政治との諸関係に注目することの必要性は明らかであろう。本書は個別の章により、あるいは本書全体の連鎖により、一九四五年を以前の過去とは断絶した新しい始まりとするような史観によって、隠蔽され忘却に追い込まれてきた記憶を呼び戻すことを目指している。

本書は、日本学術振興会　基盤研究（B）「一九四五年を跨境して――アジアにおける英米文学教育のジオポリティックス」を出発点としている。一九四五年以前のアジアで英米文学研究・教育に携わったひとびとが、一九四五年以降にどのような道を歩んだのか、そしてそれがアメリカ覇権下での文化冷戦・冷戦文化とどのような関係性を結ぶのかを考察すること、一九四五年を断絶線として捉えるのではなく、それを跨境して連続・反復・継承された事象を明らかにす

ることが、出発点における課題であった。

当初は帝国日本とその支配下に置かれたアジアにおける英語文学・文化・教育関係者の、一九四五年を横断する軌跡を研究対象としたが、それらを鏡として形成されたアジア国民文化・文学・教育とその関係者にまで視野を拡大することになった。一九四五年以前、少数の教育エリートの占有物であった英語文学・文化・教育は、一九四五年以降アメリカ的デモクラシー伝達媒体として大衆化され、映画・音楽・コミックスなどのポピュラー・カルチャーとの対抗・交渉・融合を通じて、その形と意義を変容させていく。文学などのハイブラウ文化と、コミックス・音楽・映画などの大衆文化とのあいだの文化序列を再考することもまた、課題となっていった。

二〇一八年八月、成均館大学校（韓国）ＣＯＲＥ事業団の主催で開催された国際学術ワークショップ「アメリカ問題、東アジア冷戦文化研究の現状と課題」が、この展開に及ぼした影響は甚大である。冷戦文化研究の豊かな蓄積をもつ韓国研究者との対話を通して、文化冷戦をインターアジアな視点で捉える必要性と可能性が明らかになった。このような経緯を経て編成された本書は、インターアジアという視点を加えながら、時間・地理・国家・ジャンル・メディアを横断する。

2　先行研究の検討

本書の視座を形成するに至った、先行する学問上の流れはいくつかある。日本に関して言えば、ひとつには、英米圏でのアーカイブ調査に基づいた冷戦期の文化と政策に関する諸研究に応答して行われてきた、冷戦期文化政策に関する研究である。またその中で特に日本における英米文学を帝国時代、戦間期、戦後と国際的な地政学を念頭に置いて分析する研究が出てきた。

まず、戦後日本における文化冷戦の諸相については、松田武『戦後日本におけるアメリカのソフト・パワー』[*1]、渡辺靖『アメリカン・センター』[*2]、土屋由香『親米日本の構築――アメリカの対日情報・教育政策と日本占領』[*3]、貴志俊彦・

土屋由香（編）『文化冷戦の時代』[4]などが、文化冷戦の枠組を明らかにした。このような枠組において、具体的な側面に着目した研究も分厚く蓄積されてきている。映像・音声メディアに関しては、谷川健司『アメリカ映画と占領政策』[5]、土屋由香・吉見俊哉（編）『占領する目・占領する声――ＣＩＥ／ＵＳＩＳ映画とＶＯＡラジオ』[6]、人物交流含めた文化外交を概観した藤田文子『アメリカ文化外交と日本――冷戦期の文化と人の交流』[7]、土屋由香『文化冷戦と科学技術――アメリカの対外情報プログラムとアジア』[8]などにおいて、著しい研究の進展が見られた。金志映『日本文学の〈戦後〉と変奏される〈アメリカ〉――占領から文化冷戦の時代へ』[9]では、文学領域における文化冷戦の事例として、ロックフェラー財団創作フェローとして渡米した日本人文学者の諸例が検討されている。小出いずみ『日米交流史の中の福田なをみ――「外国研究」とライブラリアン』[10]は、日米交流・図書館行政・ジェンダーの交錯を明らかにする、研究の最前線である。

日本を対象とした文化政策で目立つのは文学を含めたアメリカ文化の導入である。これらの再検討を支える研究の流れとして、英米圏で一九九〇年代以降進んだ研究があるが（これについては後述する）、時期的に重なり合う日本での再考の潮流もある。そのひとつとして、まず日本において第二次世界大戦を経験しながら冷戦期の文化政策のなかで研究を行ってきた世代が、冷戦期末期にある程度みずからを相対化しえる視座を得て、第二次世界大戦後の文化政策を、とりわけ英米文学の受容という点から振り返る著作を挙げておきたい。これらは二〇〇〇年代以降の冷戦期文化研究の先駆けであるとともに、批判的に検討するべき貴重な史料でもある。佐伯彰一『日米関係のなかの文学』[11]は、環太平洋的視座から、日本においてアメリカ文学がもった歴史的・文化的・政治的関係をその渦中にいた立場から検討している。一九七七年から一九九五年にかけて東京大学アメリカ研究資料センターが刊行した「先生に聞く」シリーズもまた同様の価値を持つ。戦後のアメリカ研究を率いてきた清水博、高木八尺、中屋健一、西川正身、松本重治、大橋吉之輔、大橋健三郎といった研究者が、戦後、一定の複雑な思いを抱えながらも大使館その他の援助を受けながら研究に乗り出した過程を伝える一級の史料である。[12]帝国日本における英文学の地政学的研究としては、齋藤一『帝国日本の英文学』[13]、および戦時については宮崎芳三『太平洋戦争と英文学者』[14]がある。敗戦後、アメリカ主導の日本人再教育・民主化プログ

ラムの一環として、米英文学を中心とする文学の読書が勧められた。その源泉をアメリカ南部知識人のニュークリティシズムに求め、戦後の図書館・出版政策および女子教育との関係を論じた章も含む研究として、越智博美『モダニズムの南部的瞬間――アメリカ南部知識人と冷戦』[15]がある。戦後の英文学については、大道千穂「あるびよん・くらぶ再評価――『あるびよん――英文化総合誌』から再考する戦後日本の英文学」[16]がある。これは戦後の日本において大きな存在になっていくアメリカ合衆国に対して連合王国の文化の意義づけを念頭においた雑誌『あるびよん』（一九四九年発刊）の研究である。これらの成果をふまえ、本書執筆者である越智博美が冷戦期東アジアにおけるアメリカ研究について、齋藤一がＣＩＡに資金提供を受けていた文化自由会議（Congress for Cultural Freedom）とヒロシマについて、吉原ゆかりが創作文学教育と東アジア冷戦について論じた章を収めた英語論集*Asian English*[17]が二〇二一年に刊行されている。

特に日本の冷戦期を特徴づける要素が、核をめぐる言説である。被爆国でありながらも、原子力の平和利用が早くから提唱されるなかで、被爆の記憶はいかに語られたのか。一九四五年以降に日本語で書かれた「原爆文学」については数多くの研究があるが、英語圏において定番の研究書といえばJohn Whitier Treat, *Writing Ground Zero: Japanese Literature and the Atomic Bomb*[18]があり、原民喜、大田洋子、峠三吉、大江健三郎、井伏鱒二、林京子、小田実といった作家の作品や「原爆文学」に関する論争が英語圏でも知られることとなった。

トリートの著作は二〇一〇年に邦訳されているが[19]、この翻訳に関わった研究者も在籍する原爆文学研究会が主体になって『〈原爆〉を読む文化事典』[20]が出版された。齋藤一は、この事典に「英米文学者と核時代」を寄稿している。この事典には、マイケル・ゴーマン「アメリカ大衆文学と核の神話」、野坂昭雄「核ＳＦと核批評」、山本昭宏「核・原爆を歌う」などトリートの研究には欠けていた大衆文化についての項目もある。

韓国において冷戦文化研究の先駆的役割を果たしたのは、聖公会大学東アジア研究所が残した数々の業績であろう。聖公会大学東アジア研究所編『冷戦アジアの文化風景・一――一九四〇年代～一九五〇年代』[21]、同『冷戦アジアの文化風景・二――一九六〇年代～一九七〇年代』[22]、ペク・ウォンダム・カン・サンヒョン編『熱戦のなかの冷戦、冷戦のなかの熱戦――冷戦アジアの思想心理戦』[23]はそれぞれ、同研究所が数年のスパンで開催した国際シンポジウムの成果物であ

る。韓国のみならず、日本、中国、台湾、香港、フィリピン、タイ、シンガポールなどの研究者が参加し、それぞれの地域で脱植民地化や近代国民国家の形成が冷戦構造の中で進み、映画、大衆音楽、文学、青年文化なども「文化冷戦」の磁場のなかにあったことを報告している。二〇〇〇年代後半に出た前二著が総括的な報告であるのに対して、二〇一〇年代後半に出た三つ目が「思想心理戦」に焦点を合わせているのも、その間の韓国の冷戦文化研究が、大規模かつ着実なアーカイブ調査によって行われるようになったことを示している。

また、聖公会大の成果物に触発され、大きな成果を挙げたものとして、仁荷大韓国学研究所・韓国映像資料院共同国際学術会議「冷戦時代「自由アジア」の文化／メディアネットワーク」[*24]や権ボドゥレ（クオン）編著『アメリカとアジア――一九五〇年代の世界のイメージ』[*25]がある。前者は戦後東アジアの文化冷戦で主要な役割を果たした「アジア財団」の様々な活動を検討したが、韓国の国立映画アーカイブである韓国映像資料院が直接企画に携わっていることは、着実なアーカイビングの基礎のうえに研究が進んでいることを示している。後者もまた大型の外部資金を得て、北米などのフーバー研究所その他で大規模なアーカイブ調査を行っているグループの初期の結果物である（後続の研究プロジェクトは現在も進行中）。これらの国際会議や書籍の刊行に参加した鄭鍾賢（チョン・ジョンヒョン）、李奉範（イ・ボンボム）、権ボドゥレ、サンジュン・リーは、本書にも論文を寄稿している。

台湾の場合、東西冷戦と国共内戦が重なっていたため、冷戦期の文芸界は国民党政府による反共文芸体制と同盟国アメリカによる米援文芸体制という、ハードとソフトの二重の体制に支配されていた。それゆえ、研究も二つの方向に分かれる。反共文芸体制については、林果顕『「中華文化復興運動推進委員会」の研究（一九六六～一九七五）』[*26]や封徳屏『国民党の文芸政策およびその実践（一九二八～一九八一）』[*27]などが、国民党政府による文化・文芸政策の制定過程や文学への介入の経緯を明らかにしている。一方、米援文芸体制については、一九九〇年代にすでに言及があるものの、当時はあくまでモダニズム文学研究の一環に過ぎず、米援文芸体制そのものに焦点が当てられるようになったのは、二〇〇五年の王梅香の修士論文『荒涼たる歳月の美しさ／アメリカの力？　戦後米援文化と五、六〇年代反共文学・モダニズム思潮の発展との関係』[*28]以降である。同論文により、米国広報・文化交流局（ＵＳＩＳ）主導による文芸出版・翻

訳事業から、台湾大学外文系（外国語文学科）を舞台としたニュークリティシズムの受容と『文学雑誌』『現代文学』の刊行、さらにアイオワ大学インターナショナル・ライティング・プログラム（The International Writing Program：ＩＷＰ）に至るまで一連の台米ネットワークの存在が明るみに出された。王梅香はさらに一〇年後の博士論文『隠蔽された権力：米援文芸体制下の台湾・香港文学（1950～1962）』[29]で、研究範囲を台湾から香港にまで広げ、アメリカ政府が文芸作品の翻訳事業を通して政治権力を広範な地域に浸透させたプロセスを描いた。この間、冷戦期の文芸研究は盛んになり、単德興「冷戦時代におけるアメリカ文学の中国語訳：今日世界出版社の文学翻訳と文化政治」[30]、および本書所収の陳建忠「米国広報・文化交流局（ＵＳＩＳ）と台湾文学史の書き換え――アメリカ援助体制下の台湾・香港における雑誌出版の考察を中心に」[31]などが、ＵＳＩＳによる雑誌・翻訳出版事業の詳細を論じている。また、二〇一一年から一三年まで国立成功大学で毎年開催された国際シンポジウムの成果として『現代の媒介：冷戦下の台湾・香港文芸国際学術研究シンポジウム論文集』[32]が刊行され、文学から映画まで、台湾・香港からマレーシアまで、多様な角度から冷戦文化が捉えられるようになった。さらに、比較文学の学問史研究の分野でも、劉羿宏が修士論文『台湾における外文系の再構築、一九六〇年代～一九七〇年』[33]で米援の影響を台湾大学外文系の学科編成、および語学・文学教育のレベルで考察した。また最新の研究成果として、王智明が『翻訳の在地化――台湾における外国文学研究百年の軌跡』[34]で、二〇世紀初頭の中国から二一世紀の台湾まで、文字通り百年にわたる外国文学受容の流れに冷戦期の欧米文学の受容を位置付け、台湾大学外文系で教鞭を執った夏濟安・侯健・顔元叔を対象に、アメリカとの関係を文学者個人の内的経験として描いている。なお、日本支配下、台北帝国大学における比較文学の制度化に関しては、橋本恭子『『華麗島文学史』とその時代――比較文学者島田謹二の台湾体験』[35]に詳しい。

英語圏文化研究の領域においては、冷戦末期の頃から、単に冷戦に言及した文化的な所産を扱うにとどまらず、むしろ、たとえば一九五〇年代の豊かなアメリカという文化イメージそれ自体が「封じ込め」の文化であるという、アラン・ネイデル『封じ込め文化――アメリカのナラティヴ、ポストモダニズム、および原子時代』[36]、ピーター・カズニック『冷戦の文化再考』[37]等によって示された新たな視座が現れた。またそれに並行して、エレイン・タイラー・メイ『家路につ

く――冷戦期におけるアメリカの家族』[*38]、ジョン・デミリオ『性の政治、性のコミュニティ――一九四〇年～一九七〇年におけるアメリカ合衆国におけるホモセクシュアルなマイノリティの創成』[*39]など、ジェンダー、セクシュアリティにおいても一定の規範がそうした冷戦文化を支えてきたことも明らかになる。そうした文化の背後に、国務省、CIAなどの国家機関や、民間の財団などが深く関与する文化政策があることもまた、アーカイブ調査から明らかになっている。ピーター・コールマンによる『リベラルな陰謀――文化自由会議と戦後ヨーロッパの心理戦勝利のための闘争』[*40]は、西側知識人団体である文化自由会議とCIAの関わりを詳らかにする研究であり、またそうした隠密のプログラムではなく公式の文化政策として音楽、ダンス、映画、文学（研究）といった諸分野がいかにソフト・パワーのプログラムとして重視されてきたかという実証的な研究も多数現れている。こうした展開を足場にしながら、冷戦を、東西のみならず第三世界までも巻き込むグローバルな交渉として捉える研究潮流も生じている。マイケル・デニング『三つの世界の時代における文化』[*41]、アンドリュー・ハモンド『グローバル冷戦文学――東西およびポストコロニアルな視点』[*42]らが代表的だが、同時にそうした眼差しは米ソ、日米、といった二国間に限られた研究から、環太平洋、東アジアといった圏域での複層的な様相をめぐる研究にも繋がっている。

3　本書の構成

第一部は、帝国時代から冷戦期にいたる日本に関係する章を集める。

1章、越智博美「新しい女性に捧げる『赤毛のアン』――村岡花子と戦後アメリカの文化政策」では、近年、ようやく光が当たり始めた村岡花子の戦時協力に注目する。彼女がいかに「銃後」文化の構築にみずからの文章で関わっていたか、その文章は、時に凄まじいほどに皇国の女を前面に押し出していく。しかし、戦後まもなく村岡は「新しい女性」はいかにあるべきかを説き始めた。村岡の銃後言説と戦後の言説を、生活、ジェンダー規範、とりわけ母性をキーワードにしながらその連続性について指摘したうえで、村岡が「アン」のシリーズを結節点として冷戦期の女性性や家族、家

庭の再構築に関与した可能性を指摘する。

2章、金志映（キム・ジヨン）「占領者から親しい「隣人」へ――冷戦期の日米親善と庄野潤三『ガンビア滞在記』における「アメリカ」」は、ロックフェラー財団の支援を受けて一九五七年にアメリカに留学した庄野潤三のアメリカ体験並びにその体験に基づく『ガンビア滞在記』（一九五九年）に表れる「アメリカ」の表象を考察する。オハイオ州の小さな町ガンビアでの日常を描く庄野の滞在記は一見、極めて非政治的に見えるが、善意に満ちた親しい「隣人」として「アメリカ」を描く表象は、占領者／被占領者から冷戦下の同盟国に移行した日米関係を支える役割を果たした可能性がある。

3章、杉本章吾「占領期のターザン漫画における大衆的想像力の所在――アフリカ・原子力・メロドラマ」は、ターザンというアメリカン・ヒーローが占領期においていかにして児童漫画に受容され、そこにいかなる大衆的な想像力が節合されていったのか、その内実を検討したものである。そのうえで、ターザン漫画では、しばしばコロニアルな想像力と原子力をめぐる大衆的想像力が結びつくなかで、文明と野蛮の弁証法的なメロドラマが展開されるとともに、原子力を適切に制御しえる善なる科学国家としてアメリカが表象されることで、その核保有の正当性が強調されていることを明らかにした。

4章、齋藤一「一九五四年の「死の水曜日」」は、一九五四年三月に発生した第五福竜丸事件（「ビキニ事件」）に抗議するために同年一〇月に出版された現代詩人会編『死の灰詩集』に収録された、詩人・翻訳家の堀口大学の「死の水曜日」という詩と、英米文学・比較文学者の福田陸太郎による'Ash Wednesday'というタイトルの英訳に注目し、特にこの英訳がベルギーでの国際会議や詩人・編集者のスティーブン・スペンダーに評価されたことの理由と意義について考察する。

5章、西田桐子「日本におけるアフリカ系アメリカ人文学受容と社会主義――冷戦下の反米的平和運動から第三世界へ」は、一九五〇年代に始まり、一九六〇年代に飛躍的な進展を遂げたアフリカ系アメリカ人文学の日本における本格的な受容に着目する。木島始と橋本福夫による「黒人文学」受容と社会主義の関係に着目することで、冷戦が日本におけるアフリカ系アメリカ人文学受容に及ぼした影響を明らかにする。また、冷戦下で展開されていった国際的な平和運

動や民族解放運動などの種々の抵抗運動と共鳴する形で、黒人とその文学に対する日本人の関心は醸成されていったことを立証する。

第二部は朝鮮半島冷戦文化をめぐる論文を集める。

6章、金牡蘭（キム・モラン）「デアドラ論は完成されていない――李孝石の「緑の塔」（一九四〇年）における失敗の諸相」は、李孝石（イ・ヒョソク）（京城帝国大学法文学部英文学専攻出身）の日本語長編「緑の塔」を題材として、一九四〇年の朝鮮における「アイルランド文学」（アングロ・アイリッシュ文学）の意味内容を考察したものである。「英語青年」英民（ヨンミン）が学問と理知の世界を夢見ながらも、ついにそれに到達できなかったことに注目することで、これまで植民地期朝鮮文学の「迂回的な抵抗」を示す記号として解釈されがちであった作中の「アイルランド文学」という素材が、逆にそのような抵抗の放棄を宣言していた可能性を示唆している。

7章、鄭鍾賢「崔載瑞（チェ・ジェソ）の「マッカーサー」――マッカーサー表象を通じてみた、ある親日エリートの解放前後」は、大日本帝国時代の親日エリート崔載瑞（英文学者）が、朝鮮半島の日本からの解放以降の時期に、ダグラス・マッカーサーを英雄化して描いた評伝・翻訳書に注目する。朝鮮半島の支配者が大日本帝国からアメリカ帝国に交代、大日本帝国の「大東亜」は自由と民主主義の言説と結合して冷戦期東アジア「自由陣営」ブロックに変形する。そのなかで日本帝国臣民・英文学者・崔載瑞は、「冷戦市民」として自己を再構成した。

8章、李奉範「冷戦と援助の力学、韓国冷戦文化の政治性とアジア的地平」は、アメリカ民間団体の韓国文化団体援助と、韓国の文化冷戦への参入の政治性に注目、一九六〇年代の韓国の冷戦文化と学術の動向、特徴がもっとも顕著に表れている団体として、CIA機関である文化自由会議の韓国本部と、高麗大学亜細亜問題研究所を取り上げる。この二団体は冷戦文化を持続的に生産、国内外に伝播、拡散させ、インターアジアな冷戦文化ネットワークとの交流と連帯を実現させた。

9章、黄鎬徳（ファン・ホドク）「白鉄（ペク・チョル）の「新批評（ニュークリティシズム）」前後、韓国現代文学批評理論の冷戦的様相」は、冷戦下の自由民主主義陣営、米国と韓国の文壇と大学で可能な＝許された文学理論とは何かを問い続けた、白鉄（ニュークリティシズムの韓国への導

入者）を取り上げ、米国の文学理論が韓国に「援助」されたときに、それが韓国の民主主義や市民社会の発展にどのように貢献したかを問う。ニュークリティシズムが共産主義攻勢に対する防波堤であったとしても、援助された理論は、援助を受ける側によって異なって読まれ、異なって用いられた可能性があることを重視する。

第三部は米国援助体制下の台湾における文芸・学知の再編成を問う。一九五〇～六〇年代の東西冷戦／戒厳令下における台湾・香港では、米国広報・文化交流局に代表されるアメリカの援助体制が、出版・翻訳・流通や、新世代作家の誕生に多大な影響を与えていた。

10章、陳建忠「「米国広報・文化交流局」（USIS）と台湾文学史の書き換え――アメリカ援助体制下の台湾・香港における雑誌出版の考察を中心に」は、USISに代表されるアメリカ援助体制によって香港および台湾で出版された雑誌や書籍、翻訳が、台湾大学外文系に学ぶ新世代作家の誕生に多大な影響を与えていた点を分析する。さらに、欧米モダニズムの美意識を直接吸収し、戦後の台湾文学に新たな領域を切り開いた新世代作家とアメリカ文芸援助体制との関係を文学史に組み込み、台湾文学史をいかに書き換えるか、という点を課題として考察する。

11章、橋本恭子「東西冷戦下の台湾における「中国派」比較文学の誕生――中華文化復興運動と台米関係の視点から」は、台湾で一九七〇年代に誕生した「中国派」比較文学という学問に着目する。国民党政府が東西冷戦下で次々と打ち出した文化政策には、中国文化の発揚と西洋文化との融合という、ベクトルの異なる目標が共存していた。洋の東西に跨る比較文学という学問はこのような文化政策の理念に合致し、特に中華文化復興運動とは緊密な関係にあったが、それを中心で支えていたのが台湾大学外文系の英米文学者である。本章では、中華民国とアメリカという二局的な視点から、「中国派」比較文学が誕生した意義を探っていく。

第四部は、インターアジアな展開を見せた文化事象に関する論文を集める。

12章、佐野正人「東アジア的モダニズムをめぐって」は、最近のモダニズムの再考の流れをふまえ、西洋のハイ・カルチャー（文学、絵画など）が主流とされ、他地域のローカルなモダニズムは副次的・派生的・模倣的と見られてきたモダニズム研究の西洋中心主義を見直すために、一九三〇年代以降現在に至るまでの、韓国・台湾・香港・日本の歌謡

曲・大衆文学・映画などの大衆的メディアを取り上げ、インターアジアな「東アジア的モダニズム」のあり方を位置づけ直す。

13章、権ボドゥレ「林語堂、「東洋」と「知恵」の政治性――一九五〇～六〇年代韓国における林語堂ブームと「二つの中国」」は、林語堂とその作品の、トランスパシフィック／インターアジアな移動の文化政治に注目する。一九三〇年代からアメリカ合衆国において小説家・評論家として活躍した林語堂は、一九五〇年代末から六〇年代にかけて韓国の出版市場でブームを巻き起こす。彼のアメリカ・韓国における人気の要因を、第二次世界大戦及び戦後冷戦構造との関係において検討、一九五〇年代以降の韓国における林語堂受容の歴史的文脈を、ベストセラー『生活の発見』を中心に考察する。

14章、崔珍碩（チェ・ジンソク）「近代／中国／女性、一九四〇～六〇年代韓国の中国認識――韓国における謝冰瑩自伝の受容史を中心に」は、言語・国境・一九四五年を跨境して流通した、中国湖南省出身の台湾人作家・謝冰瑩（一九〇六～二〇〇〇）の自伝に注目する。韓国における謝自伝受容史の背後に、植民地世代韓国知識人の中国認識の変化を跡づける。謝は、一九四〇～六〇年代韓国で、脱封建／抗日／反共の旗手とされ、「自由」世界としての台湾と韓国の連帯可能性を示唆する存在とされたが、一九六〇年代後半になると韓国の読者大衆のあいだで忘れ去られた名前となっていった。

15章、サンジュン・リー「アジア財団の映画プロジェクトと一九五〇年代アジアの文化冷戦」は、一九五四年に「アジア財団」（The Asia Foundation：TAF）と改称された「自由アジア委員会」（The Committee for a Free Asia：CFA）の一九五〇年代の映画プロジェクトの起源を歴史的に眺望する。米・スタンフォード大学フーバー研究所（Hoover Institute）のアジア財団文書（Asia Foundation Papers）とイエール大学のロバート・ブルーム文書（Robert M. Blum Papers）、その他の資料を総合し、現在までよく知られてこなかった自由アジア委員会の設立初期の歴史や活動、自体内での製作など、アジアの組織との協力を含めた初期映画プロジェクトを議論する。

16章、南隆太「戒厳令下のコミックス――一九七〇年代フィリピンにおける『新しい社会』と国語／文学」は、シェイクスピア・テクストを中心として英語文学の空間およびメディア間の移動がもたらす変容と受容、その背景にある力

学を検討した。アメリカで若者の文学離れを阻止するために刊行された*Classics Illustrated*と、旧宗主国であるアメリカからの自立を謳いながらも協調関係にあったマルコス政権および戒厳令下のフィリピンでその模倣として刊行された*Famous Classics Illustrated*に注目する。シェイクスピア作品が舞台から印刷物へ、イギリスからアメリカ経由でフィリピンへ、欧米の高級文化からフィリピンの土着・大衆文化へ移動するさまと、冷戦期のフィリピンのグローバル反共文化政策とマルコス政権下の文化・教育政策との連動を調査研究した。

17章、吉原ゆかり「一九四五年を跨境する文学・文化の地政学――N・V・M・ゴンザーレスの環太平洋・インターアジア旅程」は、一九四五年という時間境界、太平洋やアジア内部の国民国家の地理的文化的言語的境界、ヴァーナキュラーとアメリカ語の言語境界など、複数の境界線を跨境しつつそれらを問題化した作家であり、アメリカ語による文学（あるいはそれに翻訳可能な文学）をもって「世界文学」とすることへの違和感を表明しつづけたフィリピン作家・ゴンザーレスの経歴・作品を検証、一九四五年を跨境する文学・文化の地政学を問う。

18章、渡辺直紀「六八革命と東アジア――思想・言説連環の冷戦的文脈」では、一九六八年に全世界を席巻した若者たちの闘争・叛乱の思想的連関を、東アジア地域における冷戦／熱戦の文脈を詳細に考慮しながら再検討する。その運動は、アルジェリア、ベトナム、中東とパレスチナ、中国など、第三世界諸国での紛争や戦争、社会変動を受けて、フランスやアメリカ、日本などで展開された。従来、その思想連環は、これら先進国・地域の運動の相互影響を中心に論じられたが、本章ではその世界的同時性が、東アジア地域において冷戦／熱戦の渦中に進んだことを念頭に入れて、連関の構造を再検証する。

このように本書の射程は、一九四五年以前と以降のアジアにおける文化の、断絶ではなく、反復性・連続性・再活用面に注目する貫戦史的な視点を採用している。取り上げられる地域は、朝鮮半島、台湾、ビルマ、シンガポール、インドネシア、フィリピン、アメリカ、日本に跨る。アジアに位置する研究者たちが、アジア文化・文学研究を横断し、交差させ立体化させる本書によって、文学・文化の政治学・地政学の新領域を提示したといえる。

本書の執筆・査読・編集のすべての段階で、筑波大学出版会に大きなご助力・ご尽力をいただいた。記して感謝の意

を捧げたい。

二〇二四年三月　越智博美・齋藤一・橋本恭子・吉原ゆかり・渡辺直紀

〔付記〕本書1章・4章・6章・12章・16章・17章・18章は、日本学術振興会基盤研究（B）「一九四五年を跨境して――アジアにおける英米文学教育のジオポリティックス」（代表・吉原ゆかり）（課題番号 16H03392）の成果である。

註

1　岩波書店、二〇〇八年。
2　岩波書店、二〇〇八年。
3　明石書店、二〇〇九年。
4　国際書院、二〇〇九年。
5　京都大学学術出版会、二〇〇二年。
6　東京大学出版会、二〇一二年。
7　東京大学出版会、二〇一五年。
8　京都大学学術出版会、二〇二一年。
9　ミネルヴァ書房、二〇一九年。
10　勉誠出版、二〇二二年。
11　文藝春秋、一九八四年。

12 東京大学アメリカ研究資料センター、一九七七年～一九九五年。
13 人文書院、二〇〇六年。
14 研究社、一九九九年。
15 研究社、二〇一二年。
16 『ヴァージニア・ウルフ研究』三六号、二〇一九年、七九～九八頁。
17 Myles Chilton, Steve Clark and Yukari Yoshihara (eds.), *Asian English: Histotories, Texts, Institutions* (Palgrave, 2021).
18 John Whittier Treat, *Writing Ground Zero: Japanese Literature and the Atomic Bomb* (University of Chicago Press, 1995).
19 ジョン・W・トリート『グラウンド・ゼロを書く――日本文学と原爆』水島裕雅、成定薫、野坂昭雄監訳、法政大学出版局、二〇一〇年。
20 川口隆行編著、青弓社、二〇一七年。
21 성공회대동아시아연구소『냉전아시아의 문화풍경（1）１９４０～１９５０년대』현실문화、二〇〇八年。
22 성공회대동아시아연구소『냉전아시아의 문화풍경（2）１９６０～１９７０년대』현실문화、二〇〇九年。
23 백원담・강성현『열전 속 냉전、냉전 속 열전――냉전아시아의 사상심리전』진인진、二〇一七年。
24 인하대한국학연구소・한국영상자료원「냉전시대「자유아시아」의 문화／미디어네트워크」（二〇一七年六月二九日・三〇日開催／資料集のみで単行本の刊行はなし）。
25 권보드래편『미국과 아시아――１９５０년대 세계성의 심상지리』아연출판부、二〇一八年。
26 「中華文化復興運動推行委員會」之研究（一九六六～一九七五）』国立政治大学修士論文、二〇〇一年。
27 『國民党文藝政策及其實踐（一九二八～一九八一）』淡江大学博士論文、二〇〇九年。
28 『肅殺歳月的美麗／美力？ 戰後美援文化與五、六〇年代反共文學、現代主義思潮發展之關係』国立成功大学修士論文、二〇〇五年。
29 『隠蔽權力：美援文藝體制下的台港文學（1950-1962）』国立清華大学博士論文、二〇一五年。
30 「冷戰時代的美國文學中譯：今日世界出版社之文學翻譯與文化政治」『中外文學』第三六巻第四期、二〇〇七年。
31 「「美新處」與臺灣文學史重寫：以美援文藝體制下的台・港雑誌出版為考察中心」二〇一二年。
32 『媒介現代：冷戰中的台港文藝國際學術研討會論文集』里仁書局、二〇一六年。

33 "Re-Configuring *Waiwenxi*〔外文系〕in Taiwan, 1960s to 1970s" 国立中興大学修士論文、二〇二二年。

34 『落地轉譯——臺灣外文研究的百年軌跡』聯經、二〇二二年。

35 三元社、二〇二二年。

36 Alan Nadel, *Containment Culture: American Narratives, Postmodernism, and the Atomic Age* (Duke University Press, 1995).

37 Peter J. Kuznick and James Burkhart Gilbert (eds.), *Rethinking Cold War Culture* (Smithonian Institutions Press, 2019).

38 Elaine Tyler May, *Homeward Bound: American Families in the Cold War Era* (Basic Books, 1988).

39 Johan D'Emilio, *Sexual Politics, Sexual Communities: The Making of a Homosexual Minority in the United States, 1940-1970* (University of Chicago Press, 1983).

40 Peter Coleman, *The Liberal Conspiracy: The Congress For Cultural Freedom And The Struggle For The Mind Of Postwar Europe* (Free Press, 1989).

41 Michael Denning, *Culture in the Age of Three Worlds* (Verso Books, 2004).

42 Andrew Hammond, *Global Cold War Literature: Western, Eastern and Postcolonial Perspectives* (Routledge, 2011).